

安倍政権どうみる

朝日新聞 2013年6月19日

参院選を前に、高い支持率を保つ安倍政権をどうみるか。民意はどこへ向かうのか。元外務省主任分析官で作家の佐藤優さんに聞いた。

■危機の処方箋ちぐはぐ

安倍政権の発足から約半年が経過し、最近**株価が乱高下するなど、不安な状況も生まれている。それでも内閣支持率が高止まりしているのは、迷走した民主党政権を経て、有権者が政治に疲れているからだ。**

ドイツの社会学者ニクラス・ルーマンが言うように、**人は一度高いレベルで信頼してしまうと、相手が応えなくても信頼感は失われない。なぜなら、そういう人を信頼した自分がみじめになるから**だろう。

これは現在の安倍政権にも当てはまる社会心理で、**信頼の臨界点を越えるまで高支持率は続く**だろう。どこで臨界点を迎えるのか。株価下落や円安の水準、夏の参院選の議席数を挙げる人もいるが、それらは臨界点にならないだろう。空気がどこで変わるのか、予測不能な部分が多い。

ただ言えるのは、日本はいま、明らかな転機を迎えていることだ。医学的に言えば、重篤な状況だ。それは90年代後半の橋本龍太郎内閣の頃から続いている。

バブル崩壊後の景気低迷や冷戦終結を受け、日本は経済・財政や外交政策の転換を迫られてきた。この15年余り、**日本が何とかもってきたのは、国民が積み上げた預金があり、教育面での知的な基礎体力も高かったからだ。しかし、そのアドバンテージも使い果たしつつあり、結論を求められる状況**にきている。

安倍さんの処方箋（しょほうせん）は、例えば政府が諜報（ちょうほう）員を養成するなどして国家の機能を強くし、教育改革などを通じて個人を強化するというものだが、間違っている。新卒就職者がすぐに離職する事態を放置したり、学校への成果主義の導入を認めたりするなど、対応もちぐはぐになっている。

いま必要なのは、個人と国家の間にある、会社や学校といった社会的な機能を強くすることだ。安倍さんには危機を乗り切ってほしいと思うが、政策の一つ一つを見ていると、正直なところ不安が募る。

（聞き手・藤生明）



さとう・まさる 1960年生まれ。作家、元外務省主任分析官。

著作に「自壊する帝国」「この国を壊す者へ」「ナショナリズムという迷宮」など。